

【音楽科部研究構想図】 2 年次

全校研究主題

自走する子の育成

主題設定時の音楽科部の状況

1. 今日的な課題から

予測困難な時代を生きる児童・生徒には、自ら問いをもち、多様な他者と関わりながら、自分なりの考えや価値を形成し、主体的に学び続けていくことが求められている。また、自分のよさや可能性を認識し、自信をもって物事に取り組むことや、他者の考えや価値観を尊重しながら共に学ぶことも重要である。

2. 目の前の子どもの姿から

児童・生徒は、音楽の授業に意欲的に取り組み、自分なりの思いや表現をもちながら、仲間と関わって学ぶことができています。一方で、思いを音楽の要素と結び付けたり、必要な方法を自ら選択したり、自分の変化や成長を実感したりする姿は十分ではない。

音楽科部の目指す姿

音楽的な見方・考え方を働かせ、これまでの学びを生かしながら、自ら課題や願いをもち、その実現に向けて学び方を考え、表現や鑑賞を深めるとともに、自分や仲間の感じ方や表現を捉え直し、自分なりの音楽の楽しみ方や価値を見だし、主体的に音楽と関わり続ける児童・生徒

音楽科研究主題

生き生きと輝く児童・生徒の育成

1年次の成果と課題

音楽を形づくっている要素をよりどころとした 9 年間の学びを積み重ねることで、児童・生徒が音楽的な見方・考え方を働かせながら主体的に学ぶ姿が見られた。一方で、学年段階ごとの学びのつながりや発展性を十分に意識した指導となっておらず、これまでの学びを生かして次の学びへとつなげることに課題が見られた。

自走に必要な資質・能力

発見力「自己理解・他者意識」

音楽科部の研究仮説

1. 9年間を通して、音楽を形づくっている要素をよりどころとし、系統的に扱うことで、学びの連続性や発展性、往還的な学びを生み出し、音楽的な見方・考え方をさらに働かせることができるだろう。

2. 目指す結果を明確にし、その実現に向けて必要な手段を自ら選択・調整するとともに、その結果を振り返り、選択した手段の有効性を検証することで、自らの表現や音楽の捉え方の高まりに気づき、次の学びへとつなげることができるだろう。

3. 生活や社会と音や音楽とのつながりに気づき、自分なりの価値を見出す学習を位置付けることで、音楽のよさや自己の学びの価値を実感し、音楽の楽しさをより深く味わいながら、主体的に音楽と関わるることができるだろう。

音楽科部の研究内容

1. 9年間を通した、カリキュラム構成の工夫

- (1) 音楽を形づくっている要素をよりどころとした、9年間を通した系統的なカリキュラムを構成する。
- (2) 学年を超えて既習の学びを生かし、新たな気づきへつながる題材構成を工夫する。
- (3) 表現と鑑賞を往還しながら、音楽的な見方・考え方を働かせて、学びを深める学習を位置付ける。

2. 方法と結果を結び付けて考える学習サイクルの工夫

- (1) 目指す結果(目的)を明確にし、その実現につながる手段を意図的に選択・調整する学数活動を位置付ける。
- (2) 自己の表現や音楽の捉え方の高まりを振り返り、選択した手段の有効性を検証して、次の学習につなげる学習サイクルを位置付ける。

3. 生活や社会と音や音楽とのつながりに気づき、自分なりの価値を見出す学習活動の工夫

- (1) 生活や社会とのつながりを実感できる教材や実践的な学習場面を設定する。
- (2) 自己の学びの価値を自覚できる教材や実践的な学習場面を設定する。
- (3) 他教科を取り入れるなどの学習活動を位置付ける。

生き生きと輝く児童生徒の育成

岡本恭子 野原健人 谷川雅美

要約

音楽科部では、児童生徒が音や音楽と主体的に関わり、自らの感じ方や表現に自信をもち、音楽の楽しさを深く実感しながら、生涯にわたって音楽と豊かに関わり続けることを願っている。そのために、義務教育学校の9年間を見通し、音楽を形づくっている要素をよりどころとして、既習の学びを生かしながら新たな気付きへとつながる系統的なカリキュラムを構成する。また、自らの思いや意図の実現に向けて必要な方法を選択・調整し、試行錯誤するとともに、その過程や結果を振り返ることで、自らの表現や音楽の捉え方の高まりに気付き、次の学びへとつなげる学習サイクルを位置付ける。さらに、生活や社会と音や音楽とのつながりに気付き、自分なりの音楽のよさや価値を見出す学習活動を大切にす。こうした学びをより循環させる力として「発見力」を位置付け、「自己理解」と「他者意識」を働かせながら、自らの変化や成長、音楽のよさや価値を見出し、自己の学びの価値を実感できるようにしたい。その積み重ねによって、自らの感じ方や表現への自信を育み、音楽の楽しさをより深く実感することが、さらに音楽と関わろうとする意欲につながると考える。そして、音楽の学びを通して育まれる自信や意欲、他者を尊重する姿勢などの非認知的な力を、自らの生き方へとつなげていくことで、音楽と共に自分らしく豊かな人生を創り出していく「生き生きと輝く児童生徒」の育成を目指す。

【キーワード】音楽を形づくっている要素、発見力、自己理解・他者意識、音楽における自己肯定感

1. はじめに

音楽科は、一つの正解を追い求める教科ではない。音色やリズム、旋律、強弱など、音楽を形づくっている要素を知覚し、その働きを捉える認知的な側面がある一方で、聴く人の感情や身体に働きかけて心を動かしたり、自らの思いや感情を表現したりする非認知的な側面も併せもっている。

こうした音楽の特質があるからこそ、児童生徒は音や音楽と向き合い、自分なりに感じ、考え、表現することができる。そして、他者の多様な感じ方や表現にふれながら、新たな音楽のよさや表現の可能性に気付いたり、自らの感じ方の広がりや表現の高まりを実感したりすることができる。

本校音楽科では、こうした音楽科ならではの学びを通して、児童生徒一人一人が自分な

りの音楽のよさや価値を見出すとともに、感じ方の広がりや表現の高まりに気付き、自己の成長を実感できることを大切にしたいと考えている。こうした気付きや実感の積み重ねが、自分の学びを肯定的に捉え、感じ方や表現への自信をもつことにつながり、「音楽が楽しい」という思いをより深いものにしていくと考えるからである。

このように、児童生徒が自らの感じ方や表現に自信をもち、音楽の楽しさを深く実感しながら主体的に学ぶ姿を、本校音楽科では「生き生きと輝く」姿と捉えている。

また、この「生き生きと輝く」姿は、音楽科の学びの中だけにとどまるものではない。音楽の学びを通して、自分なりの感じ方や表現に価値を見出し、自信をもつことは、自分自身のよさや可能性に気付き、自分らしく生

きていこうとすることにもつながる。さらに、自分とは異なる他者の感じ方や表現にふれ、その違いを受け止めながら新たな価値に出会う経験は、多様な他者と共に豊かに生きていくための力にもつながっていく。加えて、音楽科の学びの中で見出した音楽のよさや価値を日常生活の中でも感じ取り、自ら音楽と関わることによって、音楽が一人一人の生活をより豊かにするものにしていくことにもつながっていくと考える。

このように、音楽科の学びを通して、自信や意欲、他者を尊重する姿勢などの非認知的な力を育むとともに、学びの中で見出した音楽の価値を自らの生活へとつなげ、生涯にわたって音楽と豊かに関わっていくことも、本校音楽科が目指す「生き生きと輝く」姿であり、本校音楽科が捉える音楽における「自走する子」の姿である。

2. 主題設定の理由

(1) 今日的な課題

価値観や社会の在り方が大きく変化し、予測困難な時代を生きる児童生徒が、自分らしく豊かに生きていくためには、自ら問いをもち、多様な他者と関わりながら、自分なりの考えや価値を形成し、主体的に学び続けていくことが求められている。

音楽科においても、単に知識や技能を身に付けるだけでなく、音楽との関わりを通して、自分のよさや可能性を認識し、自信をもって物事に取り組むこと、他者の考えや価値観を尊重しながら共に学ぶこと、困難に直面しても粘り強く取り組むことなど、自らの学びや生き方を支える非認知的な力を育むことも重要であると考えます。

こうした力を育む上で、音楽科では、児童生徒一人一人が音や音楽と向き合い、自分なりに感じ、考え、表現する学びを進めていく。その過程では、「どのように表現したいのか」

「そのために何を工夫すればよいのか」と自ら問い、方法を選択しながら試行錯誤したり、他者の感じ方や表現にふれることで自分の考えを捉え直したりすることができる。そして、自ら選択した方法によって表現がどのように変化したのか、これまでとは異なる音楽の捉え方ができるようになったのかを振り返ることで、自らの感じ方の広がりや表現の高まりに気付き、自己の成長や学びの価値を見出すことができると考える。

このように、自ら問いをもち、方法を選択し、試行錯誤しながら音楽と関わり、その過程や結果から自らの変化や成長を見出す学びを積み重ねることが、自分の感じ方や表現への自信や、さらに音楽と関わろうとする意欲につながると考える。こうした学びを通して、児童生徒が自らの学びの価値を実感し、自信をもって主体的に学び続けていくことを大切にしたい。

(2) 目の前の子どもの姿から

ア 研究に関わる質問紙調査の結果

4月と7月に実施した質問紙調査では、「自分から問いや願いをもち、解決に向けて学習を進めている」と回答した児童生徒が、4月の51%から7月には56%へと5ポイント増加した。また、「学習の方法や進め方が分かっていて学習を進めている」は56%から58%へと2ポイント、「学習の方法や進め方を自分で決めて学習を進めている」は51%から54%へと3ポイント増加した。このことから、自ら問いや願いをもち、学習を進めようとする意識や、学習の進め方についての理解には、一定の高まりが見られたと考えられる。

一方で、7月の結果を比較すると、「自分から問いや願いをもち、解決に向けて学習を進めている」と回答した割合が56%であるのに対し、「学習の方法や進め方を自分で決めて学習を進めている」は54%にとどまっている。

また、学習の方法や進め方を理解していると回答した割合も58%であり、学習の進め方を理解していることと、それを自分で決めて実行することには違いがあると考えられる。つまり、自ら学習に向かおうとする意識は高まりつつあるものの、自分の問いや願いを実現するために、何に着目し、どのような方法で学習を進めるかを自ら考え、選択することには、なお課題があると捉えた。また、7月の結果には学年による差も見られた。

研究に対する評価 質問調査紙									
4月 音楽 「あてはまる」	9年	8年	7年	6年	5年	4年	3年	全体	
自ら問いや願いをもち、解決に向けて学習を進めている。	44%	45%	39%	51%	54%	63%	63%	51%	
学習の方法や進め方が分かっている。	47%	44%	45%	59%	66%	69%	64%	56%	
学習の方法や進め方を自分で決めて学習を進めている。	42%	43%	39%	60%	59%	62%	53%	51%	
10%以上、上がった 10%以上、下がった 70%以上 49%以下									
7月 音楽 「あてはまる」	9年	8年	7年	6年	5年	4年	3年	全体	
自ら問いや願いをもち、解決に向けて学習を進めている。	55%	52%	49%	46%	65%	67%	55%	56%	
学習の方法や進め方が分かっている。	53%	48%	56%	56%	66%	73%	55%	58%	
学習の方法や進め方を自分で決めて学習を進めている。	55%	47%	53%	53%	58%	61%	49%	54%	

イ 授業での児童生徒の様子

本校の児童生徒は、音楽科の授業に意欲的に取り組み、特に表現領域では、「こんなふうに歌いたい」「こんな音楽にしたい」といった自分なりの思いをもちながら表現に向かう姿が多く見られる。また、その思いの実現に向けて、音色や速度、強弱などの音楽を形づくっている要素に着目し、試行錯誤を重ねながら表現を工夫することができる。さらに、その過程で、仲間との対話を通して新たな気づきを得たり、音楽のよさを探究したりする姿も、発達段階に応じて育ってきている。

一方で、自分なりの思いをもつことができても、その思いを音楽を形づくっている要素と結び付けながら、どのような表現を目指すのかという意図を明確にしたり、その実現に向けて必要な方法を自ら選択したりすることには課題が見られる。

さらに、音楽科は一つの正解を追い求める教科ではなく、学びの成果も点数のように明確に表れるものではない。そのため、「自分の

この表現でよいのだろうか」「自分が感じたことは合っているのだろうか」と、自らの感じ方や表現に確信をもてず、自分なりの考えをもっていても、それを仲間に伝えたり、表現として表したりすることをためらう姿も見られる。特に学年が上がるにつれて周囲の目を意識し、自らの感じ方や表現に自信をもてなくなる姿も見受けられる。

実際の学びの過程に目を向けると、試行錯誤を重ねる中で表現が高まったり、これまでとは異なる音楽の捉え方ができるようになったりするなど、児童生徒自身には確かな変化や成長が生まれている。しかし、そうした自らの変化や成長に十分に気付かず、自分の学びにどのような価値があったのかを実感するまでには至っていない姿も見られる。

そこで、こうした課題を解決するためには、児童生徒自身が、自らの学びの中にある価値を発見できるようにすることが重要であると考える。例えば、表現活動では、「最初と比べて、自分たちの音楽がこのように変わった」「この工夫によって、自分が表したかった音楽に近付いた」と、自らの表現の高まりに気付くこと、鑑賞では、音楽を形づくっている要素をよりどころとして、「以前とは異なる音楽の捉え方ができるようになった」と、自らの感じ方や聴き方の広がり気付くことである。こうした、これまで無意識・無自覚であった自らの変化や成長を意識化し、価値付けることによって、自己の学びの価値を実感し、自らの表現や感じ方への自信をもてるようにしたい。

このように、音楽の学びを通して育まれる、自らの表現や感じ方に対する自信を、本校音楽科では「音楽における自己肯定感」と捉える。そして、この「音楽における自己肯定感」が高まることで、「音楽が楽しい」という思いも、単に歌ったり演奏したりすることの楽しさだけではなく、音楽のよさを自ら見出すこ

とや、自分の感じ方や表現が変化していくことそのものを楽しむ姿へと深まっていくと考える。

さらに、その楽しさが、「もっとやってみたい」「もっと知りたい」「もっと自分なりに表現してみたい」という次の学びへの意欲を生み、そこでまた新たな音楽のよさや、自らの変化や成長を発見することにつながっていく。

このように、発見を起点として学びが循環しながら高まっていくことで、児童生徒は音楽の楽しさをより深く実感し、「生き生きと輝く児童生徒」の姿が生まれていくと考えた。

また、このような学びのサイクルを、より循環させていくための力として「発見力」を位置付けた。音楽科における「発見力」は、「自己理解」と「他者意識」の二つの視点から捉えることとした。

その具体的な姿は、発達段階や学習内容によって異なるが、「自己理解」とは、「自分はどのように表現したいのか」「今の自分に必要なことは何か」と、自らの思いや学びの状況を捉えるとともに、学習の過程における自らの変化や成長に気付くことである。一方、「他者意識」とは、「聴く人にどのように伝わるだろうか」「自分の表現を聴いた人はどのように感じるだろうか」と他者を意識したり、自分とは異なる感じ方や考え方にふれたりすることを通して、自らの感じ方や考え、表現を捉え直し、深めていくことである。音楽科の学びは、自分一人の中だけで完結するものではない。自らの思いや意図の実現に向けて、必要な方法を選択・調整しながら主体的に学ぶとともに、他者との関わりを通して自分自身を見つめ直すことも大切である。例えば、仲間の感じ方や表現にふれることで、それまで気付かなかった自らの感じ方に気付いたり、自分とは異なる感じ方に出会うことで、自らの考えや表現を捉え直したりすることができ

る。また、自らの表現が他者にどのように受け止められたのかを知ることで、自分では気付かなかった表現のよさや新たな課題を見出すこともできる。

このように、自らの思いや学びの状況、変化や成長を捉える「自己理解」と、他者を意識し、他者との関わりを通して自らの感じ方や表現を捉え直す「他者意識」を働かせることが、「音楽における自己肯定感」を高め、さらに音楽の楽しさを深く実感するという学びのサイクルを支えていくものと考えた。

3. 目指す姿と研究主題

- ・音楽を形づくっている要素をよりどころとして、自分なりの思いや意図をもち、その実現に向けて必要な方法を自ら選択・調整し、試行錯誤しながら学びを進めることができる姿。
- ・自らの感じ方や表現、学びの状況を振り返るとともに、他者の感じ方や表現にふれながら、自己理解を深め、他者意識を働かせ、自らの変化や成長、音楽のよさや価値を見出すことができる姿。
- ・自らの学びの価値を実感し、自らの感じ方や表現に自信をもち、音楽の楽しさをより深く実感しながら、主体的に音楽と関わり続けることができる姿。

〈研究主題〉

生き生きと輝く児童生徒の育成

4. 研究仮説

- ・9年間を通して、音楽を形づくっている要素をよりどころとし、系統的に扱うことで、学びの連続性や発展性、往還的な学びを生み出し、音楽的な見方・考え方をさらに働かせることができるだろう。
- ・目指す結果を明確にし、その実現に向けて必要な手段を自ら選択・調整するとともに、

その結果を振り返り、選択した手段の有効性を検証することで、自らの表現や音楽の捉え方の高まりに気づき、次の学びへとつなげることができるだろう。

- ・生活や社会と音や音楽とのつながりに気づき、自分なりの価値を見出す学習を位置付けることで、音楽のよさや自己の学びの価値を実感し、音楽の楽しさをより深く味わいながら、主体的に音楽と関わるができるだろう。

5. 研究内容

研究内容 1

9年間を通したカリキュラム構成の工夫

- (1) 音楽を形づくっている要素をよりどころとした、9年間を通した系統的なカリキュラムを構成する。
- (2) 学年を超えて既習の学びを生かし、新たな気づきへつながる題材構成を工夫する。
- (3) 表現と鑑賞を往還しながら、音楽的な見方・考え方を働かせて、学びを深める学習を位置付ける。

【実践例】

第8・9学年「能と歌舞伎」

本実践では、「音色」を中心となる要素として位置付け、8年生では歌舞伎と能の比較鑑賞、9年生では長唄や謡の表現活動へと発展する題材を構成した。8年生では「音色を聴き取り、その意味や価値を理解する学び」、9年生では「音色を意図的に生み出し、表現する学び」とすることで、同じ音楽を形づくっている要素を軸に、既習の学びを生かしながら鑑賞から表現へと系統的につなぐことを意図した。

8年生の歌舞伎『勧進帳』の鑑賞では、第一印象を交流する中で「なぜそのように感じたのか」と問い返すことにより、生徒の意識

を印象の根拠となる「音色」へと向けた。その後、長唄の声や囃子の音色に着目し、それらが歌舞伎の華やかさや力強さ、情景や登場人物の心情とどのように関わっているのかを考えた。これにより、生徒は漠然と感じていた歌舞伎の魅力を、音色を根拠として捉えることができるようになった。

続く能『敦盛』の鑑賞では、歌舞伎で培った「音色をよりどころとして聴く見方」を生かし、謡の声や笛・鼓の音色、間や響きなどに自ら着目する姿が見られた。さらに、歌舞伎と能を「音色」という共通の視点から比較することで、能の静けさや音の少なさを表面的な特徴として捉えるのではなく、間や響き、息遣い、音色の変化が、情景や登場人物の心情を豊かに表現していることに気づき、それぞれの伝統芸能がもつ音楽的なよさや価値を見出すことができた。

さらに9年生では、8年生の鑑賞で培った音色への感性や理解を生かし、長唄や謡の表現活動を行った。生徒は、8年生で聴き取ってきた長唄や謡の声の音色や響き、息遣いなどの特徴を根拠をもって想起しながら、実際に自分の声でその音色を生み出そうと試行錯誤する姿が見られた。単に旋律や歌詞を正しく歌うのではなく、「どのような声の音色にすれば長唄らしさが生まれるのか」「謡の声の響きや息遣いをどのように表現すれば、そのよさが伝わるのか」と、音色をよりどころとして表現を工夫することができた。

また、自ら表現することによって、鑑賞したときには聴き取るだけであった声の響きや息遣い、間の取り方などが、実際には身体や呼吸、発声の工夫によって生み出されていることにも気付くことができた。こうした姿から、8年生の鑑賞で「音色を聴き取り、その意味や価値を理解する」学びが、9年生では「音色を意図的に生み出し、表現する」学びへと発展するとともに、実際に表現する経

験によって、既習の音楽のよさや価値を改めて捉え直す姿が見られた。

研究内容 2

方法と結果を結び付けて考える学習サイクルの工夫

- (1) 目指す結果（目的）を明確にし、その実現につながる手段を意図的に選択・調整する学習活動を位置付ける。
- (2) 自己の表現や音楽の捉え方の高まりを振り返り、選択した手段の有効性を検証して、次の学習につなげる学習サイクルを位置付ける。

【実践例】

第7学年「曲の構成や曲想の変化を生かして合唱しよう」(『夢の世界を』)

本実践では、生徒が『夢の世界を』を通して「どんな表現ができるようになりたいか」という願い（目的）を明確にし、その実現に向けて一単位時間ごとの個人課題を設定した上で、最適な学習手段を意図的に選択・調整しながら探究する学習サイクルを位置付けた。

全体での音取りや構造の把握を行った後、生徒は自身の課題に応じて活動形態や方法を自ら選択した。具体的には、「一人でピアノや音源を活用しながら音程や旋律の動きを集中して確認する活動」「同じパートや他パートの仲間と一緒に声を合わせ、強弱のバランスを確かめる活動」「表現の工夫に行き詰まった際に教師から発声に関する具体的な助言を得る活動」「互いに歌声を聴き合ってアドバイスし合ったり、タブレット端末等で自分の歌唱を録音・再生して客観的に聴き直したりする活動」など、課題解決に必要な学び方を自ら判断して活動を展開した。

各時間の終末には、「選択した学び方が、自分の設定した願いや個人課題の解決に対して本当に有効であったか」を具体的に振り返り、

その検証を行う時間を設定した。

振り返りの中で生徒からは、

「最初はソプラノパートのみんなと音程を確認し、その後他パートと一緒に歌ってみた。舌を下げ、口の中の空間を作ることで、少し声に響きが出てきて、高音も滑らかに歌うことができたと感じた」

「一人で録音を聴いて確認したことで、強弱の変化は意識できていたものの、山場に向かう旋律の盛り上がりで音程が少し下がってしまうという新たな課題が見つかった」といった、客観的な成果と課題の捉え直しをすることができた。

生徒たちはこれらの気づきから、「次は別のパートの人と一緒に合わせて音程のズレを確認しよう」「もう一度発声からやりなおしてみよう」など、自発的に次の時間の学び方を再構築していった。このように、生徒が目指す音楽表現（目的）と自らの学びの手段を結び付けて検証・修正を繰り返す過程を通して、生徒一人一人が自分に合った最適な学び方を見つけ出し、より主体的に次の学習へ向かう姿が見られた。

【実践例】

第9学年「作曲者の思いに迫り、表現しよう」

本実践では、合唱曲「ミモザ」の表現活動で、自分たちが目指す表現を明確にし、その実現に向けて必要な方法を選択・調整するとともに、表現の変化から選択した方法の有効性を検証し、次の学習へとつなげる学習サイクルを位置付けた。

題材の導入では、楽曲から感じ取ったイメージや表現したい思いを交流し、その記述をテキストマイニングによって可視化することで、学級全体が目指す「ミモザ」の表現を共有した。その後の音取りの段階では、個人練習や少人数での練習などから、自分に必要な方法を選択できるようにした。単に音程やり

ズムを正しく歌うことを目的とするのではなく、旋律や響きなどに着目しながら、目指す表現に近付くためにどのように歌えばよいのかを考え、試行錯誤できるようにした。

また、学習の節目では自分たちの演奏を録音して客観的に聴き、聴き取った音楽的な特徴と、そこから感じ取ったことを交流しそれらをテキストマイニングによって可視化した。そこから、当初に描いた「目指す表現」と現在の演奏から感じ取られる表現とを比較することで、自らが選択した方法によって表現がどのように変化したのか、目指す表現にどこまで近付いたのかを検証できるようにした。

本時では、こうしたこれまでの学びに加え、作曲家からのフィードバックを受け取り、作曲者が演奏から感じたことや作品に込めた思いと、自分たちがこれまで大切にしてきた表現への思いとを重ね合わせた。それによって自分たちの演奏を改めて捉え直し、楽曲の中からさらに追究したい部分を見出すとともに、その部分をどのような表現に高めたいのかを明確にした。そして、その実現に向けて、音楽を形づくっている要素をよりどころとしながら、探究できるようにした。

このように、「さらにどのような表現を目指したいのか」「そのためには次に何を工夫すればよいのか」を考え、次時に必要な練習方法や表現の工夫を選択・調整することで、生徒が方法と結果とを結び付けながら、自らの表現を高めていく学習サイクルを構成した。

その中で生徒は、目指す表現と自分たちの演奏とを繰り返し比較し、単に「表現がよくなった」と捉えるだけでなく、音楽を形づくっている要素をよりどころとして、どのような工夫によって表現がどのように変化したのかを音楽的な根拠をもって捉え、自らの表現の高まりを実感することができるようになってきた。

研究内容 3

生活や社会と音や音楽とのつながりに気付き、自分なりの価値を見出す学習活動の工夫

- (1) 生活や社会とのつながりを 実感できる教材や実践的な学習場面を設定する。
- (2) 自己の学びの価値を自覚できる教材や実践的な学習場面を設定する。
- (3) 他教科を取り入れるなどの学習活動を位置付ける。

【実践例】

第2学年「生活の中にある音を楽しもう」

本題材では、国語科で学習した「雨のうた」の詩を手掛かりとし、生活経験の中で感じた雨の様子や情景を想起して音で表現する活動を行った。児童は、小雨やザーザー降りなど、実際に経験した雨の様子を思い浮かべ、その音を表すために様々な楽器を試しながら、音色を選択したり音の出し方を工夫したりして、自分が表したい雨の音に近づくように表現をつくっていった。

活動の中で児童は、同じ楽器でも、打つ位置や奏法、使うものを変えることで音色が変化することに気付いた。また、仲間の表現を見聴きすることで、自分にはなかった音や表現の工夫に気付き、それらを自分の表現に取り入れようとする姿も見られた。

児童A：「同じ楽器でも、たたくところを変えると音が変わった。雨の音に近くなるように、いろいろ試してみたい。」
児童B：「〇〇さんの音を聴いて、雨がぼつぼつ降っている感じがした。自分もたたき方を工夫してみたい。」

このように、児童は詩を手掛かりに、生活経験の中で思い描いた雨のイメージを音楽で表現する中で、音色や奏法に着目し、自分の表したいことに合わせて表現を工夫することができるようになった。また、仲間の表現との違いやよさに気付き、それを自分の表現に生かそうとする姿も見られた。

さらに、学習の終末には、自分の表現を振り返り、「最初に考えていた雨と比べてどう変わったか」「どのような工夫が表したい雨につながったか」を考える時間を設けた。自分の表現の変化や工夫の意図を振り返ることで、児童は自分の工夫が表現にどのようにつながったかを捉え、さらに試してみたいことを考えることができた。

本実践では、国語科で学習した詩と生活経験を結び付けることで、児童が生活の中にある音を想起し、それぞれの感じ方や思い描く情景の違いを表現に生かすことができた。また、音色や奏法を工夫して自分のイメージに合う音を探したり、仲間の表現に触れてそのよさを自分の表現に取り入れたりする中で、音や音楽の多様なよさを見出す姿が見られた。さらに、自分の表現の変化を振り返ることは、自分なりの工夫や表現のよさを捉え直し、自らの変化や成長に気付くことにつながった。このように、生活経験を音楽表現につなげ、仲間との交流を通して自分や他者の感じ方・表現のよさを発見する学びは、自己理解や他者意識を深めるとともに、自分なりの表現への自信を育み、音楽における自己肯定感を高めることにつながると考える。

6. 成果と課題

児童生徒は、これらの実践を通して、自分が感じたことや表現したいことを、音楽を形づくっている要素と結び付け、音楽的な根拠をもって捉えることができるようになってきた。また、自らの表現を振り返り、「どのような工夫によって、表現がどのように変化したのか」を捉えることで、単に「できた」「上手になった」という実感にとどまらず、自らの表現の高まりを音楽的な根拠をもって見出す姿が見られるようになった。こうした自らの変化や成長への気付きは、自分の学びの価値を実感し、自らの感じ方や表現への自信をも

つことにつながった。このことから、自分の思いや学びの状況を捉え、自らの変化や成長に気付くという「自己理解」が深まってきたと考える。

さらに、自らの感じ方や表現に自信をもつことで、自分の考えを表現したり、他者の感じ方や表現に積極的に関わったりする姿も見られるようになった。その中で、自分とは異なる感じ方や表現を単なる違いとして捉えるのではなく、そこにある音楽的なよさや価値に気付き、それを通して自らの感じ方や表現を捉え直す姿も生まれてきた。このように、他者を意識し、その感じ方や表現に耳を傾けることで、新たな音楽のよさや自分自身の感じ方に気付く姿から、本校音楽科が「発見力」の一つとして位置付ける「他者意識」も育まれてきたと考える。

このように、「自己理解」と「他者意識」を働かせながら、自らの変化や成長、音楽のよさや価値を発見することは、自己の学びの価値を実感し、自らの感じ方や表現への自信を育むことにつながった。そして、その自信が、さらに音楽と関わり、他者と共に新たな音楽のよさや価値を見出そうとする姿へとつながっていった。音楽を通して自分自身を知るとともに、自分とは異なる他者の感じ方や表現を尊重し、共に音楽を創り、味わうことを楽しむこと。こうした学びを積み重ねていくことが、本校音楽科の目指す「生き生きと輝く児童生徒」の育成につながるものと考えている。

一方で、児童生徒が自らの思いや意図の実現に向けて学習方法を選択・調整し、自らの変化や成長を実感できるようにするためには、発達段階に応じた支援の在り方をさらに明確にする必要がある。特に、音楽を形づくっている要素をよりどころとして自らの思いや意図を実現する力や、学びの過程を振り返って自らの成長を捉える力を、9年間の学びの中でどのように系統的に育んでいくかが課題で

ある。今後は、各学年段階で身に付けたい力と、それを支える教師の手立てを明確にし、児童生徒が自ら学び方を選択・調整しながら、主体的に音楽と関わり続けることができる指導の在り方を検討していきたい。

＜参考・引用文献＞

- ・中島寿，高倉弘光，平野次郎著（2017 年）『音楽の授業で大切なこと：なぜ学ぶのか？何を、どのように学ぶのか？』東洋館出版社
- ・田村学著（2018 年）『深い学び』東洋館出版社

【公開 I】 7 年 3 組 音楽科学習指導案

北舎 3 階 音楽室：谷川雅美

1 題材名 「イメージと音楽との関わり」

2 指導の立場

(1) 教材について

本題材では、映画音楽『ジョーズのテーマ』を教材曲として扱う。この映画音楽は、「海の中にサメがいる場面」や「サメが忍び寄る場面」という強い感情や情景を鮮明に描き出している教材である。本題材では、音楽を単に聴くだけでなく、音楽を形づくっている要素が感情に与える影響を実感した上で、「30 秒」という限られた枠組みの中で「感情（恐怖）を表現する音楽」を創作する。この活動を通して、生徒が知覚・感受を往還しながらよりよい表現を採り出す力を育成することを目指す。

(2) 児童生徒について

本学年の生徒は活発でエネルギーに満ち溢れており、7 月の合唱交流会（『COSMOS』）の取り組みにおいても、その勢いと意欲を発揮して歌い上げることができた。一方で、歌詞の意味や世界観に立ち返り、それを根拠としながら、声の出し方や表情、音色へと結び付けて表現を生み出す点には課題が見られた。表現が強弱（音量）の押し出しに偏りがちであり、曲想や表したいイメージと関わらせながら、音楽を形づくっている要素との関わり合いを捉え、根拠をもって表現を工夫する力を高めることが課題である。感覚に頼るのではなく、生徒自身が自らの表現したい感情や情景に深く向き合い、音を選択・調整しながら試行錯誤を重ねる探究的な学びを仕組んでいきたい。

(3) 指導について

本題材では、生徒が表現したい「怖さ」や「緊張感」などの感情のイメージをもとに、音色を主軸としながら、強弱やテクスチャと関連させて、自分の思いや意図に合った 30 秒の音楽を創作する活動を設定する。そのために、「木製」「金属製」「皮膜製」といった素材が異なる打楽器と音階が出せる鍵盤ハーモニカやリコーダーを配置し、生徒がもつイメージと、各楽器がもつ音色の特徴とを往還させながら、実際に音を鳴らして選択・工夫できる環境を整える。また、創作の過程においてグループ内での試行錯誤や仲間との聴き合い（中間交流）の時間を位置付ける。自分の表現を客観的に聴き返したり、仲間の音の組み合わせを聴いたりすることで、要素や要素同士の関連がどのようになっているかを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することを何度も往還させながら、より思いや意図に沿った音楽へと練り上げていく姿を目指す。

3 研究に関わって

【研究内容 1 9 年間を通したカリキュラム構成の工夫】

音楽を形づくっている要素とイメージとの関わりをより実感的に捉えさせるため、表現と鑑賞を一体的に捉えた学習構成の工夫を行った。

鑑賞において音楽の構造と、「怖さ」や「緊張感」などの感情との関わりを

深めた視点を、そのまま創作活動における音素材の選択や構成の工夫へと生かしていく。このように鑑賞と表現を何度も往還させることで、音楽を形づくっている要素や構造に対する理解を深められるようにした。

さらに、ここで育んだ視点を次題材である合唱『大切なもの』での「歌詞に応じた声色や表情の工夫」へとつなげることで、領域を越えた系統的な学びを深めるカリキュラムを構築した。

【研究内容 2 方法と結果を結び付けて考える学習サイクルの工夫】

本題材の創作活動においては、「こんな音楽を表現したい」という目的を明確に設定させる。その上で、素材別の楽器選択や強弱・テクスチャをどう変化させるかという表現方法に加え、学習方法を生徒自身で選択・調整しながら試行・検証させ、仲間と協働してよりよい表現を考えられるようにする。また、30 秒の演奏を客観的に聴き返したり、中間交流を行ったりする場を位置付ける。終末の場面では、表現の変容や、選択した学習方法（手段）の有効性を振り返りシートに記述させることで、自己の変容を客観視させ、次時の表現活動や学びへと繋がる学習サイクルを生み出す。

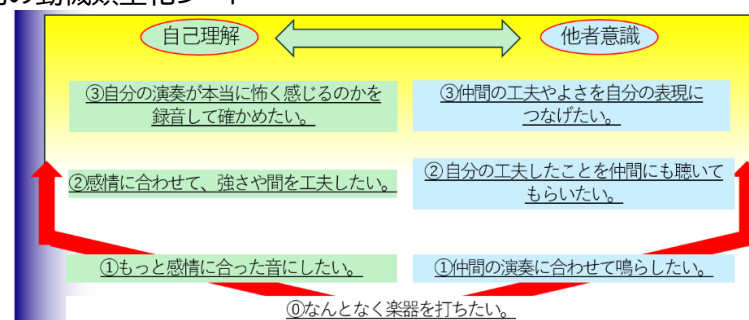
【研究内容 3 生活や社会と音や音楽とのつながりに気づき、自分なりの価値を見出す学習活動の工夫】

生徒が日常で感じる実感（恐怖や緊張感などの感情）をきっかけとし、自分の思いや生活の中での実感と、音楽表現とを直接結び付けられる学習活動を設定した。また、本時の中間交流では、他グループの強弱や間の工夫に着目させ、「驚かせようとしたときに、どんな音を出す？」「ドキドキしているときってどんな音が聴こえる？」と問いかけることで、生活体験と結び付けながら表現したいイメージ（テーマ）を具体的に捉え直させる。さらに、イメージと強弱を関わらせながら工夫している班を意図的に指名して提示し、音楽を形づくっている要素がどのように恐怖感と関わっているかを提示することで、自分たちの班の演奏を見つめ直し、よりよい表現へと再構築できるようにする。これらを通して、音の選択や工夫で多様な表現が生まれる面白さに気付かせ、音楽で思いを伝える価値を実感させることで、主体的に音楽と関わろうとする姿の育成につなげる。

4 本時の、自走に必要な資質・能力「発見力」に関わって

表出する場面	中間交流後の再構築の場面
表出する行動	仲間の演奏を聴いて、自分たちのイメージに合う工夫を見つけ、よりよい音楽へと再構築する姿

発見の動機類型化シート



5 題材指導計画

題材で育む資質・能力		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
①音楽材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解することができる。[A 表現 (3) イ] ②創意工夫を生かした表現で音楽をつくるために必要な、課題や条件に沿った音の選択や組み合わせなどの技能を身に付け、創作で表すことができる。[A 表現 (3) ウ] ③「大切なもの」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解することができる。[A 表現 (1) イ] ④創意工夫を生かした表現で「大切なもの」を歌うために必要な発声、言葉の発音、身体を使い方などの技能を身に付け、歌唱で表すことができる。[A 表現 (1) ウ] ⑤曲想と音楽の構造との関わりについて理解することができる。[B 鑑賞 (1) イ]	①音色、テクスチャ、強弱、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができる。[A 表現 (3) ア] ②「大切なもの」の旋律、強弱、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、「大切なもの」をどのように歌うかについて思いや意図をもつことができる。[A 表現 (1) ア] ③音色、リズム、速度、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる。[B 鑑賞 (1) ア]	音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、構成の違いによる曲想の変化、及びイメージと音楽との関わりに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱や創作、鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。
時	学習のねらいと主な学習活動	評価規準
1	イメージがもたらす音楽の秘密を探ろう。 映像作品の音楽を聴き、そこから得られるイメージと音楽の特徴がどのように関わっているのかを探る活動を通して、リズム、速度、旋律、強弱などの構成上の特徴を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じすることができる。 ・音楽のイメージをもつ。 ・音楽を聴いてサメや海のイメージをふくらませ、その音楽的根拠を考える。 ・実際の映画の一部分を観て、映画における音楽の役割を考える。	曲想と音楽の構造との関わりについて理解している。[知識⑤] ワークシート・活動の様子 ・イメージと音楽を形づくっている要素がどう関わっているかを理解できているかを確認する。
2	「恐怖を与える音楽」のタイトルを考えよう。 映像作品から抱いた感情をもとに仲間と協働して音楽をつくる活動を通して、音色、リズム、テクスチャ、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができる。 ・前時で捉えた「音楽が感情や情景を演出する役割であること」を踏まえ、グループでどのような「怖さ」や「緊張感」を表現したいかを話し合い、自分たちの作品のテーマを設定する。 ・ただ「怖い」という言葉にとどめず、具体的な場面や感情の変化をイメージする。 ・設定したテーマに合う音色を思い描き、準備された素材別（木製・金属製・皮膜製等）の打楽器や音階が表すことができる楽器の中から、どの楽器がふさわしいかを選ぶ。	音楽材の特徴及び音の重なり方や反復、変化、対照などの構成上の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解している。[知識①] ワークシート・活動の様子 ・仲間とイメージを共有しながらどんな音楽をつくりたいか思いや意図をもって考えているかを確認する。
3	「恐怖を与える音楽」になるように、選んだ楽器を鳴らして音を重ねてみよう。 仲間と協働して「恐怖を与える音楽」をつくる活動を通して、音色を中心に、強弱、テクスチャ、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、どのような楽器の組み合わせにするかについて、思いや意図をもつことができる。 ・グループで考えたテーマを際立たせるための奏法（鳴らし方）を試す。 ・音階を表すことができる楽器を使って恐怖を与える音の組み合わせを考える。 ・自分たちのつくった音の重なりを客観的に聴き直す。 ・さらに「怖さ」を際立たせるには、どうすればよいか（重ね方の工夫）次時に向けて考える。	音色、テクスチャ、強弱、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。[思考・判断・表現①] 活動の様子 ・テーマに合った楽器を選択することができているかを確認する。
4 (本時)	自分たちが表現したい「怖さ」が際立つように、音の重ね方を工夫しよう。 仲間と協働して「恐怖を与える音楽」をつくる活動を通して、音色を中心に、強弱、テクスチャ、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、感情や緊迫感をどのように表すかについて、思いや意図をもつことができる。 ・示範演奏を聴いて、怖さを引き立たせるためには音の重ね方や強弱、構成など、工夫する方法があることを知る。 ・仲間と試しながら、よりよい音楽表現を見つける。 ・自分たちの音楽を録音して聴いたり、仲間聴いてもらったりしながら、再構築する。	音色、テクスチャ、強弱、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。[思考・判断・表現①] ワークシート・活動の様子 ・音の重ね方や強弱、構成をどのように工夫しているかを確認する。
5	仲間に自分たちの「恐怖を与える音楽」を発表しよう。 感情をもとに仲間と協働して音楽をつくる活動を通して、音色、テクスチャ、強弱、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる。 ・仲間に発表できるように自分たちの演奏を最終確認する。 ・1 グループずつ発表し、感じたことやそれぞれのグループのよさを共有する。 ・創作活動で大事にしたことや次時につなげたいことを振り返る。	音色、テクスチャ、強弱、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考えるとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。[思考・判断・表現③] ワークシート・活動の様子 ・仲間の発表を聴いて、それぞれのグループの音楽のよさについて考えることができているかを確認する。
6	この曲が伝えたい「大切なもの」とは何かを考えよう。 「大切なもの」の歌唱活動を通して、音色や強弱、テクスチャを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考えるとともに、歌詞の内容や音楽の構造と曲想との関わりについて理解することができる。 ・「大切なもの」を聴き、感じたことや曲の印象を交流する。 ・歌詞を読み取り、どのような思いが込められているかについて考える。 ・音色や強弱、動きなどが、歌詞の内容や曲想とどのように関わっているかを考える。 ・考えたことを交流し、この曲が伝えたい「大切なもの」について自分の考えをまとめる。	・「大切なもの」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解することができる。[知識③] ・創意工夫を生かした表現で「大切なもの」を歌うために必要な発声、言葉の発音、身体を使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。[技能④] ワークシート・活動の様子 ・歌詞に込められた思いや音楽の構造が曲想とどのように関わっているかについて考えることができているかを確認する。
7	自分たちが考えた「大切なもの」を相手に伝えられるように、思いを歌にのせて表現しよう。 「大切なもの」の歌唱活動を通して、音色、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考えるとともに、歌詞に込められた思いを生かした表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもつことができる。 ・前時の学習を振り返り、この曲が伝えたい「大切なもの」について確認する。 ・前時に考えた「大切なもの」が聴き手に伝わるようにするためには、どのような音色や強弱で歌えばよいか考える。 ・自分たちで学習の方法を選択し、表現の工夫を試しながら歌唱活動を行う。 ・工夫した表現を意識して全体で合唱する。 ・本題材で大切にしたことや、自分たちの表現のよさ、次時に生かしたいことを振り返る。	「大切なもの」の音色、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことで感じたこととの関わりについて考え、「大切なもの」をどのように歌うかについて思いや意図をもっている。[思考・判断・表現②] ワークシート・活動の様子 ・この曲が伝えたい「大切なもの」が聴き手に伝わるように、どのように歌うかについて工夫しながら歌唱活動に取り組んでいるかを確認する。

6 本時のねらい

仲間と協働して「恐怖を与える音楽」をつくる活動を通して、音色を中心に、強弱、テクスチュア、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、感情や緊迫感をどのように表すかについて、思いや意図をもつことができる。〔思考力、判断力、表現力等〕

7 本時の展開（4/7）

生徒の学習活動	研究に関わって								
1 示範の音楽を聴いて、本時の活動の見通しをもつ。 ・だんだん楽器が増えることで「何かが襲いかかってくる感じ」がするな。 ・同じ音が続いているなかで突然別の楽器が鳴るとびっくりするな。 自分たちが表現したい「怖さ」が際立つように、音の重ね方を工夫しよう。 2 自分たちが考えた音楽を演奏し、さらに「怖さ」を際立たせるにはどうすればよいかを試しながら考える。 ★発見力の表出場面 ・前時録音した自分たちの30秒の演奏をタブレット等で聴き返したりしながら、「どのように音の重ね方を工夫すれば、テーマの恐怖感がより伝わるか」についてグループで意見を出し合い、よりよい表現を見つけ出す。 <table border="1" data-bbox="129 635 1545 997"> <tr> <td data-bbox="129 635 324 742">グループで考える</td><td data-bbox="324 635 1545 742"> ・少しずつ音を重ねていただけだから、音がなくなる場面をつくろうかな。 ・途中から金属楽器を入れてみようかな。 ・この部分は楽器を減らしてみようかな。 </td></tr> <tr> <td data-bbox="129 742 324 818">個人で考える</td><td data-bbox="324 742 1545 818"> ・私が担当するタンブリンの叩き方を変えたほうがいいかな。 ・この場面で急に音が無くなるほうが、恐怖感が増すかもしれないな。 </td></tr> <tr> <td data-bbox="129 818 324 925">他グループの工夫に触れる</td><td data-bbox="324 818 1545 925"> ・だんだん音を重ねて音量が増すことで「何かが近づいてくる感じ」がして怖いな。 ・急に音がなくなる工夫がおもしろいな。 ・他グループを聴いたけど、自分たちの今の工夫が一番テーマに合っているのかもしれないな。 </td></tr> <tr> <td data-bbox="129 925 324 997">グループ内で聴き合う</td><td data-bbox="324 925 1545 997"> ・クラベスを鳴らしているところに鍵盤ハーモニカが入ったほうが怖いかもしれないな。 ・トライアングルをくり返し鳴らしているところに、リコーダーを吹いてみよう。 </td></tr> </table>	グループで考える	・少しずつ音を重ねていただけだから、音がなくなる場面をつくろうかな。 ・途中から金属楽器を入れてみようかな。 ・この部分は楽器を減らしてみようかな。	個人で考える	・私が担当するタンブリンの叩き方を変えたほうがいいかな。 ・この場面で急に音が無くなるほうが、恐怖感が増すかもしれないな。	他グループの工夫に触れる	・だんだん音を重ねて音量が増すことで「何かが近づいてくる感じ」がして怖いな。 ・急に音がなくなる工夫がおもしろいな。 ・他グループを聴いたけど、自分たちの今の工夫が一番テーマに合っているのかもしれないな。	グループ内で聴き合う	・クラベスを鳴らしているところに鍵盤ハーモニカが入ったほうが怖いかもしれないな。 ・トライアングルをくり返し鳴らしているところに、リコーダーを吹いてみよう。	2【研究内容2－(1)】 ・テーマに合った楽器選択や音の重ね方について、学習方法を生徒自身で選択・調整しながら試行・検証させることで、仲間と協働してよりよい表現を考えられるようにする。 3【研究内容3－(1)】 ・他グループの音の重ね方や間の工夫に着目させ、生活体験と結び付けながら表現したいイメージを具体的に捉え直せるような問いかけをする。 3【研究内容3－(2)】 ・よりイメージが伝わるような音の重ね方を工夫している班を指名して中間交流を行い、音素材や構成上の特徴がどのように恐怖感と関わっているかを提示することで、自分たちの演奏を見つめ直して表現を再構築できるようにする。 4【研究内容2－(2)】 ・表現の変容と、選択した学習方法（手段）の有効性を振り返りシートに記述させ、次時の表現活動へ繋げられるようにする。 2・4【★発見力の表出に関わって】 ・仲間の演奏を聴き、「自分たちの工夫が、テーマに本当に合っているか」と問い、さらによりよい表現がないかを考えたり試したりする姿から見取る。 【評価規準】音色、テクスチュア、強弱、構成を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。〔思考・判断・表現〕
グループで考える	・少しずつ音を重ねていただけだから、音がなくなる場面をつくろうかな。 ・途中から金属楽器を入れてみようかな。 ・この部分は楽器を減らしてみようかな。								
個人で考える	・私が担当するタンブリンの叩き方を変えたほうがいいかな。 ・この場面で急に音が無くなるほうが、恐怖感が増すかもしれないな。								
他グループの工夫に触れる	・だんだん音を重ねて音量が増すことで「何かが近づいてくる感じ」がして怖いな。 ・急に音がなくなる工夫がおもしろいな。 ・他グループを聴いたけど、自分たちの今の工夫が一番テーマに合っているのかもしれないな。								
グループ内で聴き合う	・クラベスを鳴らしているところに鍵盤ハーモニカが入ったほうが怖いかもしれないな。 ・トライアングルをくり返し鳴らしているところに、リコーダーを吹いてみよう。								
3 全体交流で仲間の意見からさらに考えを深める。 ・じわじわと近づいて襲いかかってくる恐怖を表現するため、だんだんと音を重ねることで不気味さが増す工夫。 ・「突然襲いかかる恐怖」を表現するため、あえて間を作り、そこから一気に強い音を出して恐怖を演出する工夫。 4 仲間の演奏からよりよい表現を再構築する。★発見力の表出場面 ・「自分たちの音の重ね方は、目指すテーマに本当に合っているか」「ただ音を重ねて（減らして）いるだけになっていないか」を問い直し、再調整して30秒の創作表現を練り上げる。 ・2の学習方法のように、グループで選択しながら再構築する。 5 本時の学びを振り返る。 今日は重ね方を工夫することができた。グループの仲間ともう一度音楽を聴いて、まだ怖さが足りないと思い、急に音がなくなる場面をつくった。でも、他のグループの音楽を聴いたときに、音がなくなったあとに急に強くすることでさらに恐怖が増すことがわかったし、その方が自分たちのテーマに合っていると思った。次は発表なので、みんなが怖くなるような音楽を演奏したい。									

【公開Ⅱ】9年1組 音楽科学習指導案

南舎4階 音楽室：岡本 恭子

1 単元名 「作曲者の思いに迫り、表現しよう」

2 指導の立場

(1) 教材について

(教材名：五郎丸裕大作曲「ミモザ～私たちの未来のための混声三部合唱～」)

本楽曲は、岐阜県出身の現役大学生である作曲者が、自身の中学・高校時代を振り返り、将来への見通しがもてない中で迷い、もがきながらも、仲間や周囲の人々との出会いに支えられ、明るい未来に向かって挑戦しようとしていた当時の心境を音楽に託した、自身初となる合唱作品である。

また、本楽曲は、本校合唱部の指導にも携わる作曲者が、「自身の作品を、実際に今を生きる中学生に歌ってもらい、その演奏を作品の一つの形として残したい」と願ったこと、そして、これまで作曲者と関わりを重ねてきた9年生の生徒たちが「この曲を自分たちで歌いたい」と願ったこと、その双方の思いが重なり合う中で、本題材の教材として取り上げるに至った作品である。

進路選択を目前に控え、自らの未来について期待と不安を抱きながら歩んでいる9年生にとって、作曲者が中学・高校時代に抱いていた迷いや葛藤、そして未来へ向かおうとする思いは、決して遠いものではなく、自分自身の今と重ね合わせて捉えることのできる等身大のものである。だからこそ、生徒が楽曲に込められた思いを自分事として受け止めながら、歌詞だけでなく、旋律、強弱、音色、テクスチュアなどの音楽を形づくっている要素やその働きに着目し、「なぜこのような音楽になっているのか」「この思いを伝えるために、どのように表現したらよいのか」を考えることができる。

さらに、作曲者本人との対話を通して、創作の背景や表現に込めた意図に直接触れることができる点も、本楽曲を教材として扱う大きな価値である。作曲者の意図を受け取るだけでなく、それを手掛かりとしながら、自分たちなりに楽曲のよさや美しさを捉え、試行錯誤を重ねて表現をつくり上げていくことで、楽曲にふさわしい表現を主体的に追求する学びへとつなげることのできる教材である。

(2) 児童生徒について

本学級の生徒は、表現領域において、自分なりの願いをもち、音楽表現を楽しむながら豊かに表現することができる生徒が多い。特に、旋律やリズム、構成などの音楽を形づくっている要素の働きが生み出す曲想の特徴を感じ取り、それを生かすために強弱やテクスチュアなどを試行錯誤しながら表現を工夫し、その高まりを実感することができる。さらに、鑑賞領域においても、感受したことをもとに、要素やその働きを根拠として仲間と対話しながら、音楽のよさや美しさに自分なりの価値を見出すことができる。

また、本学級の生徒は、歌うことや仲間と声を重ねて音楽を創り上げることへの意欲が高く、9年間の音楽の学びの集大成として、これまで培ってきた力を生かしながら、自分たちなりの合唱を創り上げたいという願いをもっている。このような生徒たちだからこそ、本題材では、これまで培ってきた音楽的

な見方・考え方を働かせ、楽曲の特徴や作曲者の思いを捉えながら、仲間と試行錯誤し、自分たちなりの曲にふさわしい表現を創り上げる姿を目指したい。その過程で、表現が高まる楽しさや仲間と音楽を創り上げる喜びを味わい、音楽のよさや、その価値を改めて実感することで、9年間の学びをこれからの自分と音楽との関わりへとつなげていくことを目指したい。

3 研究に関わって

【研究内容1 9年間を通したカリキュラム構成の工夫】

9年間の音楽科の学びの集大成として、これまで系統的に扱ってきた音楽を形づくっている要素を、生徒自身が表現の目的に応じて選択・活用し、仲間と試行錯誤しながら曲にふさわしい表現を練り上げる学習活動を位置付ける。そのために、楽曲分析を丁寧に行い、要素やその働きと曲想との関わりを捉えた上で、自ら表現のよりどころを見出せるようにする。

【研究内容2 方法と結果を結び付けて考える学習サイクルの工夫】

自分たちが目指す表現の実現に向けて、パート練習や声部を組み合わせた練習、録音による聴き返し、仲間との聴き合い、楽譜の分析など、表現を高めるための練習方法を生徒自身が目的に応じて選択できるようにする。授業の終末には、選択した方法によって表現がどのように変化したのかを検証し、その結果から次時の目標を明らかにする。

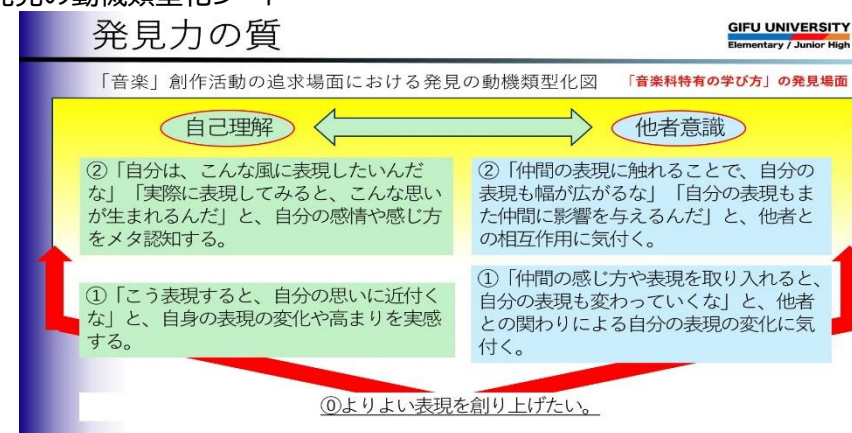
【研究内容3 生活や社会と音や音楽とのつながりに気づき、自分なりの価値を見出す学習活動の工夫】

自分たちの演奏を作曲者の模範演奏として広く発信するという題材のゴールを設定し、作曲者や多くの聴き手を意識しながら表現を創り上げる活動を位置付ける。作曲者の思いと自分たちなりの解釈や表現が重なり合うことで、作品に新たな価値が生まれることを実感するとともに、作曲者や聴き手からのフィードバックを通して、自らの音楽表現が人や社会とつながる喜びや価値を見出せるようにする。

4 本時の、自走に必要な資質・能力「発見力」に関わって

表出する場面	目指す表現を試行錯誤する場面
表出する行動	自分の表現への思いを自覚し、仲間や作曲者の思いを受け止めながら、自らの表現を捉え直す姿。

発見の動機類型化シート



5 題材指導計画

題材で育む資質・能力		
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
知合唱曲「ミモザ」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容とのかかわりを理解することができる。A表現 イ（ア） 技創意工夫を生かした表現で合唱曲「ミモザ」を歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表すことができる。A表現 ウ（ア） 技創意工夫を生かし、合唱曲「ミモザ」の全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能を身に付け、行うことができる。ウ（イ）	合唱曲「ミモザ」のリズム、旋律、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、楽曲にふさわしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図をもつことができる。A表現 ア	音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組むことができる。
時	学習のねらいと主な学習活動	評価規準
1	「ミモザ」に込められた作曲者の思いは、音楽にどのように表れているのか考えよう。 - 合唱曲「ミモザ」を聴き、曲全体から感じ取った雰囲気や印象を交流する。 - 歌詞の内容や作曲された背景を知り、未来への不安や葛藤を抱えながらも、仲間と共に前へ進もうとする作曲者の思いを捉える。 - 作曲者本人との対話を通して、自分たちが捉えた楽曲の特徴や思いを確かめ、楽曲への理解を深める。 - 音楽的な特徴と歌詞の内容や作曲者の思いとの関わりを考える。 - 楽曲に込められた思いを自分たちの演奏で伝えるために、これまでの学びを生かしながら、曲にふさわしい合唱表現を追求していくための表現に対する思いを明らかにする。	- 音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組んでいる。 [主体的に学習に取り組む態度] 知合唱曲「ミモザ」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容とのかかわりを理解している。 [知識及び技能] <u>ワークシート・活動の様子</u>
2 3	「ミモザ」の曲想を感じ取りながら、各声部ごとに表現を高めよう。 - 第1時に捉えた楽曲の特徴や作曲者の思いを振り返り、実際に自分たちの声で表現していくことへの見通しをもつ。 - 各声部の旋律を確認し、音程やリズム、言葉の発音などに気を付けながらパートごとに歌う。 - 発声や身体の使用方を意識し、曲想に応じた声の響きを感じながら、それぞれの声部を歌えるようにする。 - 声部を重ねて合唱し、旋律の重なりや響き、声部同士の関わりを感じ取りながら、楽曲全体の特徴を捉える。 - 実際に歌ったことで新たに気付いた楽曲のよさや難しさ、自分たちの演奏の課題を振り返り、より曲にふさわしい表現で歌うために必要な表現の工夫や練習方法について考える。 - 実際に歌唱することで新たに感じ取ったことや気付いたことをもとに、自分たちが目指したい「ミモザ」の表現への思いを更新し、次時の表現活動への願いをもつ。	技創意工夫を生かした表現で合唱曲「ミモザ」を歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使用などの技能を身に付け、歌唱で表している。 技創意工夫を生かし、合唱曲「ミモザ」の全体の響きや各声部の音などを聴きながら他者と合わせて演奏する技能を身に付けている。 [知識及び技能] <u>ワークシート・活動の様子</u>
4 (本時) 5	自分たちが目指す「ミモザ」を完成させよう。 - 前時までに更新してきた、自分たちが目指す「ミモザ」の表現を確認する。 - 事前に自分たちの演奏を聴いた作曲家からのフィードバックを受け取り、作曲者が演奏から感じたことや作品に込めた思いと、自分たちがこれまで大切にしてきた表現への思いとを重ね合わせる。 - 作曲家からのフィードバックを手掛かりとしながら、「自分たちはこの曲をどのように表現したいのか」を改めて考え、本時で目指す表現を明確にする。 - 目指す表現と現在の演奏との違いから、自分たちが高めたい表現上の課題を見出す。 - 課題の解決に向けて、音楽を形づくっている要素をよりどころとし、自分たちに必要な練習方法を選択して試行錯誤する。 - 全体で合唱し、選択した方法によって表現がどのように変化したのかを確認する。 - 本時の表現の変化や高まりを振り返り、実際に表現したことで新たに感じ取ったことをもとに、自分たちが目指す「ミモザ」の表現の質を高めるための課題をもつ。 - 作曲者の前で、自分たちが練り上げてきた「ミモザ」を演奏し、その表現を撮影する。完成した演奏を多くの人に向けて公開するとともに、自らも演奏を振り返ることで、表現の高まりや仲間と音楽を創り上げた喜びを実感する（第5時）	合唱曲「ミモザ」のリズム、速度、旋律、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、楽曲にふさわしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図をもっている。 [思考力・判断力・表現力等] <u>ワークシート・活動の様子</u>

6 本時のねらい

合唱曲「ミモザ」のリズム、旋律、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したものと感受したことの関わりについて考え、楽曲にふさわしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図をもつことができる。[思考力・判断力・表現力等]

7 本時の展開（4/5）

生徒の学習活動	研究に関わって
1 前時までに更新してきた、自分たちが目指す「ミモザ」の表現を確認する。 自分たちが目指す「ミモザ」を完成させよう。 2 事前に自分たちの演奏を聴いた作曲者からのフィードバックを受け取り、作曲者が演奏から感じたことや作品に込めた思いと、自分たちがこれまで大切にしてきた表現への思いとを重ね合わせる。★発見力の表出場面 ・目指す表現と現在の演奏との違いから、自分たちが高めたい表現上の課題について対話を通して見出す。 ・曲の出だしは、八分音符から始まる細かい言葉がぼつりぼつりと現れることで、静けさの中に切なさや寂しさを感じられる。このリズムが生み出す雰囲気を生かせるような歌い方を工夫したい。 ・最初は一人で抱えていた不安や寂しさが、曲が進むにつれて仲間への思いへと広がり、最後には『ありがとう』という一つの思いにたどり着いているように感じる。先生がこの曲を私たちに託してくれたのは、私たちなりの『ミモザ』を表現してほしいからだと思う。特にサビは、それぞれの旋律が重なり合い、掛け合うように進んでいく。一人一人が不安や迷いを抱えながらも、仲間がいるからこそ前へ進んでいけるという思いが伝わるように、仲間と一緒に歌うからこそ生まれる表現を工夫したい。 3 課題の解決に向けて、音楽を形づくっている要素をよりどころとし、自分たちに必要な練習方法を選択して表現を高める。★発見力の表出場面 ・「ちいさなせんりつに」から大きくクレシェンドし、サビに向かって強弱の変化が大きくなっていることから、ここが最も思いが高まる部分だと感じる。特にサビの部分に強弱が繰り返されるその不安定な思いなど、一つ一つの強弱に込められた意味を考えながら、思いの高まりや揺れが伝わる表現を工夫したい。＜強弱＞ → まず声部ごとに分かれて確かめてみよう。 ・サビではそれぞれの旋律が重なり合っているのに対し、最後の「ありがとう」はユニゾンになっている。それぞれが抱えてきた仲間への思いが、最後に一つになって伝わるように感じる。「ありがとう」の前の休符や、それまでの旋律の重なりとの違いを生かして、言葉に込められた思いが伝わる歌い方を工夫したい。＜旋律・テクスチュア＞ → 合わせて互いの旋律を聴き合いながら歌ってみよう。 4 全体で合唱し、選択した方法によって表現がどのように変化したのかを確かめる。 ・それぞれの旋律を聴き合って歌うことで、自分のパートだけを歌っていたときよりも、互いに言葉や思いを受け渡しているような掛け合いを感じられた。一人で歌うのではなく、仲間と声を重ねるからこそ、この部分のよさが表現できると思った。 ・サビでそれぞれの旋律や思いが重なり合った後に、全員で「ありがとう」と歌うことで、ばらばらだった思いが最後に一つになる感じがした。後半部分も同じようにさらに質を高めていきたい。 5 本時の学びを振り返る。 ・自分のパートだけで歌っていたときは、自分の旋律をどう表現するかだけを考えていました。でも、他のパートと合わせて互いの旋律を聴きながら歌うと、自分の歌い方も変わり、相手の歌い方もそれに応えるように変わっていききました。仲間と声を重ねることで、一人では思いつかなかった表現が生まれることに気付きました。最後の「ありがとう」まで、みんなの思いがつながっていくような表現にしていきたいです。仲間と互いの声や思いを受け止めながら表現することで、自分の感じ方や表現も変化し、一人では生み出すことのできない音楽を創り上げることができるのだと感じました。	2 【研究内容2】 ・作曲者からのフィードバックを提示し、自分たちが生み出してきた表現への思いと重ねながら、「自分たちはどのような『ミモザ』を表現したいのか」と問い返すことで、目指す表現の方向性を見定められるようにする。 3 【研究内容2】 ・机間巡視を通して、子どもが無意識に行っている表現の工夫や変化を捉えて価値付け、「なぜそのように歌ったのか」「どのような変化が生まれたのか」と問い返すことで、自らの表現の工夫とその効果を意識化できるようにする。 3 【研究内容2】 ・録音した演奏を聴き返し、目指す表現と照らし合わせることで、自分たちの表現の変化や高まりを客観的に検証できるようにする。 5 【研究内容3】 ・本時の表現活動を通して、自分や仲間の感じ方や表現がどのように変化したのかを問い返し、仲間と共に音楽を創り上げることの価値を自分なりに見出せるようにする。 3 【★発見力の表出に関わって】 ・自分の表現への思いと、仲間や作曲者の捉えを比較・関連付けて対話する場を位置付ける。また、少人数で仲間と試行錯誤し、表現の変化や互いの表現のよさを実感できる表現活動の場を位置付ける。 【評価規準】合唱曲「ミモザ」のリズム、旋律、強弱、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したものと感受したことの関わりについて考え、楽曲にふさわしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図をもっている。[思考・判断・表現]

【公開Ⅲ】6年3組 音楽科学習指導案

北舎3階 北多目的室：野原 健人

1 題材名「曲想の変化を楽しもう」

2 指導の立場

(1) 教材について 「絵の中を歩く②」

本題材では、図画工作科で鑑賞した作品を教材として扱う。この作品は、様々な表現方法で描かれており、色や形、描かれているものなどに着目することで、作品から多様な印象やイメージをもつことができる。また、作品の中に描かれたモチーフや構図から、「どんな感じがするか」「どんな音がしそうか」と想像を広げ、自分が感じ取ったことを、変化を手掛かりに表現することができる教材である。さらに、図画工作科で見つけたことや感じたことを音楽科で表現することで、同じ作品を異なる視点から捉え直すことができる。仲間の表現を聴く中で、自分とは異なる作品の捉え方に触れ、自分の感じ方を見つめ直したり、新たな感じ方に気付いたりすることができる。このように、作品を起点として図画工作科と音楽科の学びをつなぐことで、対象の見方や感じ方を広げることができる教材である。

(2) 児童生徒について

本学級の児童は、音楽について気付いたことや感じたことを言葉で表現することができる。一方で、自分の感じ方や考えを実際に表現することに抵抗があり、表現することをためらう姿も見られる。また、仲間の表現から新たな気付きを得ても、それを自分の表現に生かすことには課題がある。そこで、本題材では、自分なりに表現することの楽しさや、表現には多様な感じ方があることを感じられるようにしたい。

(3) 指導について

本時では、作品の中から表したい場面を選び、そこから感じたことや想像したことを言葉にするとともに、どのような音色が合うかを考え、音で表現する活動を設定する。そのために、様々な音色をもつ打楽器やマレットを用意し、児童が実際に音を試しながら、自分のイメージに合う音色を選択できる環境を整える。また、自分の表現を試した後に仲間交流を位置付け、仲間の表現を聴くことで、同じ場面でも音色や表現の仕方に多様な方法があることに気付けるようにする。交流で得た気付きを生かして再び音を試し、自分の表現を工夫することにつながる。

3 研究に関わって

【研究内容1 9年間を通したカリキュラム構成の工夫】

本題材では、音楽を形づくっている要素の中でも「変化」に着目し、図画工作科で作品から感じ取ったことをもとに、場面に合う音を考え、表現を工夫する学習を位置付ける。Ⅰ部では、拍や音色、強弱などの音楽を形づくっている要素を音楽活動の中で体感してきた。そこでⅡ部では、これまでの体験を基に、音色の違いやその働きについて思考し、自分の表現に生かせるようにする。9年間を通し、Ⅰ部では音楽を形づくっている要素を体感し、Ⅱ部ではその働きを捉え、Ⅲ部では要素をよりどころとして表現や鑑賞に生かすなど、発

達段階に応じて学びを発展させる。こうした学びを積み重ね、自分なりに音楽を捉え、表現するための力を育む。

【研究内容2 方法と結果を結び付けて考える学習サイクルの工夫】

本題材では、「作品のこの場面をどのような音色で表したいか」という自分の願いをもち、一人で音を試したり、仲間と交流したりしながら、その実現につながる楽器やマレット、奏法を考え、調整する学習活動を位置付ける。活動の中では、自分の表現を見つめるとともに、仲間の表現のよさや工夫を捉え、それらを生かして自分の表現を見直すことで、願いの実現に向けて学びを進められるようにする。また、活動後には、ワークシートに自分の表現や達成度を記録し、どのような音色や方法が願いの実現につながったのかを振り返ることで、自分の学びを捉え直し、次の活動につなげる学習サイクルを位置付ける。

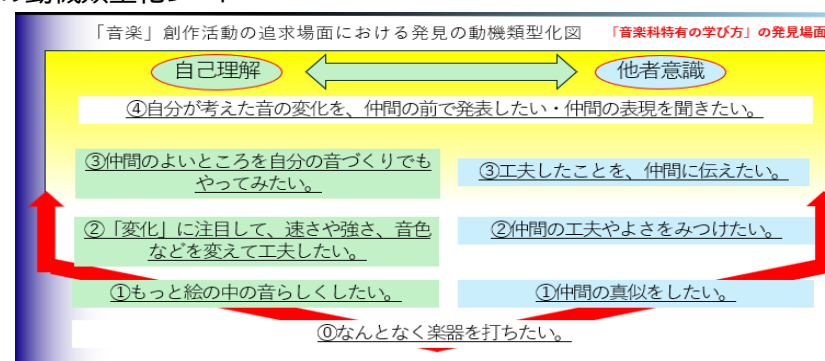
【研究内容3 生活や社会と音や音楽とのつながりに気付き、自分なりの価値を見出す学習活動の工夫】

本題材では、図画工作科で鑑賞した作品から感じ取った印象やイメージを、音や音楽で表現するなど、図画工作科と音楽科の学びを関連させた活動を位置付ける。図画工作科で作品から感じ取ったことを音楽で表現することで、視覚から得たイメージを異なる表現で捉え直し、作品の見方や感じ方を広げるとともに、音楽科では作品から感じ取ったことを手掛かりに音色や表現を工夫し、音楽で表現することのよさを実感できるようにする。また、一つの作品をそれぞれの教科の視点から捉え直す中で、図画工作科と音楽科の学びが互いを豊かにすることに気付けるようにする。こうした学びを通して、教科の学びをつなげながら、自分の感じたことや考えたことを様々な方法で表現することの価値を見いだせるようにする。

4 本時の、自走に必要な資質・能力「発見力」に関わって

表出する場面	創作活動の追求場面
表出する行動	作品の一場面から想像した情景や様子に合うイメージを言葉にし、音の変化によって感じ方が変わることを確かめながら、楽器や打ち方を変えて試したり、仲間の表現の工夫を取り入れたりして、自分の表現を工夫する姿

発見の動機類型化シート



5 題材指導計画

題材で育む資質・能力			
知識及び技能		思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
①曲想と音楽の構造との関わりについて理解することができる。 [A 表現 (1) イ] [B 鑑賞 (1) ア] ②曲想の変化に合うように、声の強さや発音、呼吸などに気を付けて歌う技能を身に付けることができる。 [A 表現 (1) ウ (イ)]		①音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出す曲想の変化を感じ取りながら、どのように表現するかについて思いや意図をもつことができる。 [B 鑑賞 (1) ア] ②音楽を形づくっている要素と曲想の変化との関わりを捉え、表したい曲想に合うように、音色や強弱、速度などの変化を考え、表現を工夫している。 [A 表現 (1) ア]	歌唱や音楽づくりの学習活動に主体的・協働的に取り組み、曲想の変化に興味・関心をもち、音楽活動を楽しみながら、仲間と関わって表現を工夫し、自分なりに音楽を楽しむようとしている。
【音楽科】学習のねらいと主な学習活動		評価基準	【図画工作科】学習のねらいと主な学習活動
1	<u>曲の感じが変わるところを見つけよう。</u> 曲想の変化に着目して聴く活動を通して、音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関わりを捉えることができる。 ・「ハンガリー舞曲第5番」を聴き、曲の感じがどのように変化しているかを感じ取る。 ・曲想が変化する部分に着目し、音色や強弱、速度など、音楽を形づくっている要素がどう関わり合って変化しているのかを聴き取る。 ・感じ取った曲想の変化と、その変化を生み出している音楽の要素について、仲間と伝え合う。 ・「どのような変化が曲の感じを変えているのか」を振り返り、次時の音楽づくりにつなげる。	曲想の変化と、音色や強弱、速度などの音楽を形づくっている要素の変化との関わりに気付いている。 [知識・技能①] <u>観察・発言・ワークシート</u> 曲の感じが変化する部分に着目し、音色や強弱、速度などがどのように変化しているかを聴き取り、その変化と曲想との関わりに気付いているかを確認する。	
2 本 時	<u>音をどう変化させたら、作品の音のイメージに近づくか考えよう。</u> 作品から思い描いた音を創作する活動を通して、音の変化に着目し、表したい情景や様子に合うように、音色や強弱、速度などを工夫して、音の変化を表現することができる。 ・人型のペープサートを作品に当て、絵の中の人になったつもりで「どんな音が出てくるかな」と考え、楽器や声で音を出してみる。 ・音がどんどん変化していく様子を、音色・速度・強さ・高さ・リズムなどを工夫しながら表現する。 ・つくった音を発表し合い、感じたことやよかったところを友達に伝える。 ・どんな変化を考えたら、どんな感じに変わったか、工夫したところや友達のよかったところを振り返る。	作品から思い描いた音のイメージに近づくように、音色や強弱、速度などを工夫して音楽を変化させながら表現している。 [思考・判断・表現②] <u>観察・発言・音づくり</u> 自分が表したい音のイメージに近づけるために、音色や強弱、速度などを試しながら、音楽の表現の変化のさせ方を工夫しているかを確認する。	<u>林リウイチさんの絵を歩いて、物語を作ろう。</u> 林リウイチの作品を鑑賞し、絵の中では何が起きているのか、自分自身の想像したことを物語にして言語化し、仲間と交流することができる。 ・第一印象を音にする活動を通して、2時間目の音楽科の授業につなげる。 ・ペープサートを使い、絵の中を動くことで、出てくるモチーフやセリフを想像しやすくする。 ・作品の中にある造形要素（色、形、構図、素材等）から、どんな感じがするのか、何が描かれているのかを明らかにして物語にすることで、イメージを広げることができる。仲間と考えを交流することで、作品の見方・考え方が広がることに気付く。
3	<u>曲想の変化を歌声で表そう。</u> 曲想の変化を生かして歌う活動を通して、音楽の表現の変化のさせ方に着目し、表したい曲想に合うように、音色や強弱、速度などを工夫して、歌い方を表現することができる。 ・「思い出のメロディー」を聴き、どのような曲想の変化があるかを感じ取る。 ・「どこを、どのように変化させて歌いたいのか」を考える。 ・音色、強弱、速度、旋律などを工夫しながら歌う。 ・仲間と聴き合い、曲想の変化が伝わったか、どのような工夫が効果的だったかを交流する。 ・交流を生かして歌い方を見直し、曲想の変化を意識して表現する。	表したい曲想に合うように、音楽の表現の変化のさせ方に着目し、速度や強さ、音色などを工夫して歌い方を表現している。 [思考・判断・表現③] <u>観察・発言・歌唱</u> 表したい曲想に近づけるために、音色や強弱、速度などを試しながら、曲想の変化に合う歌い方を工夫しているかを確認する。	

6 本時のねらい

作品から思い描いた音を創作する活動を通して、曲想の変化に着目し、表したい情景や様子に合うように、音色や強弱、速度などを工夫して、音楽の変化を表現することができる。〔思考力、判断力、表現力等②〕

7 本時の展開（2/3）

生徒の学習活動	研究に関わって
1 図画工作科での学習を振り返り、本時の自己課題を設定する - 自分が作品の中を旅して見つけた場面や物語を振り返る。 「第一印象の音」や、図画工作科で考えた音を確認する。 音をどう変化させたら、作品の音のイメージに近づくか考えよう。 2 図画工作科で考えた音を、実際の音にしてみる。 - 自分の場面や物語に合う音を、楽器やマレットなどを使って試す。 ◎「この楽器だと音は合っているけれど、〇〇な感じにしたいから、たたく場所を変えてみよう。」 3 音を変化させる。★発見力の表出場面 「この音がだんだん大きくなったら?」「音色が変わったら?」など、音の変化を試す。 - 自分が思い描いた場面の感じに近づくように、音色や強弱、速度などを工夫する。 4 中間交流 - どんな場面を表しているのか、どのように音を変化させたのかを伝え合う。 - 友達の音を聴き、「自分とは違う変化」「やってみたい工夫」を見つける。 ◎「同じ場面を表しているのに、音色や変化のさせ方が違っていておもしろい。私は〇〇さんの音色の換え方をやってみたい。」 5. 交流を生かして、音楽を作り直す。★発見力の表出場面 - 仲間の表現のよさや工夫を振り返り、自分の表現に生かせそうなことを見つける。 6 振り返り 「自分の表したい音のイメージに近づけるために、どんな工夫をしたか」「どのように音が変わったか」を振り返る。 - 仲間の表現から取り入れたことや、それによって自分の表現がどう変わったかを振り返る。 - 自己課題に対する達成度を確かめ、「次はどうしたいか」「次はどんな表現をしてみたいか」を考え、次時の願いをもつ。	1【研究内容3】 - 図画工作科で感じ取ったことや考えたことを音楽科の学習につなげられるように、図画工作科で考えた「第一印象の音」や作品の中での出来事を振り返る場を設定する。 2【研究内容2】 - 自分の願いの実現に向けて、音色や楽器を選択・調整できるように、多様な音色をもつ打楽器やマレットを用意し、実際に音を試しながら選択できる環境を整える。 3【研究内容1】 - 音の変化について思考できるように、「音をどう変化させたら、作品の音のイメージに近づくかな」と問いかけ、速度や強弱、音色などを変化させて試す場を設定する。 5【研究内容2】 - 仲間の表現のよさや工夫を自己の表現に生かし、表現を見直すことができるように、「友達のどんな工夫を自分の表現に生かしたい?」「取り入れるとどんな変化が生まれそう?」と問いかけ、再び音を試す場を設定する。 6【研究内容2】 - 自己課題に対する達成度を捉え、次時の願いにつなげられるように、「どんな変化がイメージに近づくことにつながったか」「次はどうしたいか」をワークシートに記録し、振り返る場を設定する。 3・5【★発見力の表出に関わって】 - 音づくりの様子や仲間との交流の様子を観察し、音楽の変化に着目して表現を工夫したり、仲間の表現のよさや工夫を取り入れたりしながら、自分の表現を深めたりする姿を表出させる。
Aさん 私は、絵の中の〇〇な感じを表すために、タンブリンを使って、だんだん強くしてみようと考えました。しかし、途中で友達の表現を聴いて、音色を変えながら強さも変えていたのがよいと思ったので、自分もマレットを変えてみると、もっとイメージに近づきました。最初に考えた「〇〇な感じにしたい」という願いに近づけることができたので、次は今日見つけた音の変化を生かして、表現にしたいです。	【評価規準】 作品から思い描いた音のイメージに近づくように、音楽の表現の変化のさせ方に着目し、音色や強弱、速度を工夫して表現している。〔思考・判断・表現②〕